

逆説より觀たる老子の世界（上）

天 野 鎮 雄

目 次

- 一、逆説
- 二、否定の否定としての逆説
 - (イ) 一般的（世人的）真理のある具体的特定のなものに對する逆説
 - (ロ) それに對比すゞき具体的特定のな一般的（世人的）真理のない逆説
- 三、肯定（否定の否定）よりの逆説
- 四、否定の否定としての逆説及肯定（否定の否定）よりの逆説より觀たる老子の世界（本稿は此處まで以下次回）
- 五、否定として逆説
 - (イ) 複雑否定の逆説
 - (ロ) 單純否定の逆説
 - (ハ) 一般的（世人的）真理とそれの否定と結合せる逆説
- 六、否定としての逆説より觀たる老子の世界
- 七、結語

一、逆 説

逆説とは世人一般に承認されてゐる真理を否定する事によりそれに

矛盾する説と考へられる。然し逆説は単にかゝる一般的（世人的）真理に矛盾してゐるのみではない。例へば「白馬非馬」は「白馬馬」の一般的（世人的）真理を否定して之に矛盾せるものであるが、逆説とは言はれない。之に對して「知者言」を否定せる「知者不言」は逆説と言はれる。我々は馬に非ざる白馬を了解する事は出来ない。之に對して不言の知者を了解する事が出来る。普通一般に「知者言」ものとして理解されてゐるが、かゝる真理を否定する「知者不言」も我々が理解し得るのは、かゝるものを真理として承認するが故である。「知者言」が一般的（世人的）真理としてある以上、知者は言者として把握される。従つて「知者不言」に於ては既にその知者は言者である故に、それは「言者不言」となる。従つて「知者不言」自身が既に矛盾してゐるのである。かゝる故に逆説はまたそれ自身矛盾してゐるとも言はれる。然し逆説がそれ自身矛盾してゐると觀るのは、知者を言者と解する立場からである。かゝる立場からは「知者不言」は生じて来ない。「知者言」所の知者は言ある知者であり、「知者不言」の知者は不言の知者である。従つて両真理は知者に対する立場の相違から生ず

る。即ち知者に対する認識立場の相違に起因する。一般的（世人的）真理を支へてゐる認識立場に於て知者は言ある者として把握されるのに対し、他の認識立場に於ては知者は不言として把握される。かゝる認識立場は、一般的（世人的）真理を否定する事によつて新たな真理を見出すものとせば、前者の認識立場より高次の認識立場と見る事が出来る。「知者言」と「知者不言」とは論理的に矛盾してゐるものの、論理を超越して知者をより高次の認識によつて把握する事により、両者は矛盾しなくなる。即ち論理的に矛盾である以上一方が真理であれば他方は真理となり得ないが、論理を超越し認識立場の高次によつて両者何れをも真理として可能ならしめるのである。それ故逆説たる為には、一般的（世人的）真理と対比し両者の論理的矛盾を認識立場の高次によつて解消させる事を必要とする。かくの如く逆説は一般的の認識立場より高次の認識立場に於て真理となる故に、逆説は単に一般的（世人的）真理を否定するのみに止まらず、否定によつて更に真理たり得るものでなければならぬ。所で「白馬非馬」に於ては、我々は馬に非ざる白馬を如何に認識立場を高次にしても把握する事が出来ない。かくの如く高次の認識立場に救はれずして、真理たり得ないもの即ち単に一般的（世人的）真理を否定するのみで真理を獲得し得ないものは詭辯と言はれる。

逆説は高次の認識立場に立つものであるが、然し単に「知者不言」の一説のみでは不言の知者の存在する事を理解するも、その存在を主張する根拠に我々は与る事が出来ない。我々はかゝる逆説を成立せし

める所の認識立場全体に通じ、かゝる認識立場に於ける逆説者の思想体系を知悉するのぞなければ、「知者不言」を真に理解する事が出来ない。これは即ち「知者不言」が高次の思想体系の一環としてある事を示すものである。それ故逆説は高次の認識立場に於ける思想によつて体系づけられてある事が前提となつて居なければならぬ。所で詭辯はそれが真偽であるかどうかは問題でなく、正に真らしく見せる所にあると言はれる。従つてそれは一般的（世人的）真理を単に言表上に否定したのみであつて、高次の認識立場に立ち一つの体系を持つ所より出たものではないと言ひ得よう。

二、否定の否定としての逆説

老子の真理をして真理たらしめてゐる高次の認識立場に於ける思想体系を知る為には、先づ老子の多くの逆説を整理分類する必要がある。逆説を分類するには種々の方法があらうけれども、今夫々の逆説に対比する一般的（世人的）真理との相関々係に於て分類すれば、次の三つに分つ事が出来る。即ち

- (一) 一般的（世人的）真理を否定し、更にその否定を否定する逆説
- (二) 逆説の高度の發達より一般的（世人的）真理の否定の否定が確立して肯定の立場から逆に否定する逆説

(三) 一般的（世人的）真理を単に否定せるのみの逆説

今一般的（世人的）真理の否定と更にその否定との結合せる逆説を、否定の否定としての逆説と称することとせば、かゝる逆説は更に

(イ) 一般的(世人的)真理のある具体的特定のなものに対する逆説
(ロ) それに対比すべき具体的特定の一般的な(世人的)真理のない
逆説
の二つに分類する事が出来る。

(イ) 一般的(世人的)真理のある具体的特定のなものに対する
逆説

この種の逆説に属する一例として「聖人終不為大、故能成其大」(44)を挙げる事が出来る。この逆説は「聖人為大」と言ふ一般的(世人的)真理に、対して為されたものと考へられる。今この一般的(世人的)真理と、逆説を更に一般的(世人的)真理を否定せる部分とそれを否定する部分との二つに分けて、この三つを論理的矛盾のまゝ対比すると次の如くなる。なほこの際「終」は重要な關係を有しない故に省略する。

聖人為大……………天
聖人不為大……………地
故(聖人)能成其大……………人

「天」と「地」とは論理的に矛盾する。「地」が真理たる為には一般的(世人的)真理との論理的矛盾が解消されなければならない。この矛盾が解消される為には論理を超越して認識の立場を変へなければならぬ。認識立場を変へる為には概念の内包を変へなければならぬ。即ち言表に変化はなくとも語義を変へなければならない。

逆説より觀たる老子の世界(上)(天野)

逆説が一語を二義に用ひると言はれるのは之が為である。然し逆説は一語を二義に解する事に依つて成立つのではない。逆説は一語に元來二義がある事によつて生ずるのではなく、高次の認識立場に立つてその語に新義が生ずるのである。勿論高次の認識内容を包摂する為には従來の語彙を脱して新造語が生ずるであらう。此点高次の認識立場に立つ老子に新造語の多いのを見る。或はまた新造語を用ひずとも修飾語を附する事によつて十分な場合もある。かゝる方法を取り得ぬ場合、或はそれが全体の認識立場から新義のものたる事が自明である場合には、従來の語彙を用ひるものと考へられる。逆説が一語を二義に解する事によつて成立するといふのは、語義の發生變化を理解する事なく現在の多義を有する語を以て解する所よりかゝる誤謬が生じたものと考へられる。所で今逆説に於て、一語を二義に解する事に依つて論を進めるのは、かゝる方法によつて老子の認識立場に於ける思想を把握せんが為にすぎない。さて、「天」と「地」とを対比せる場合、認識立場を変へる為には二義を持つ語として「聖人」と「大」との二つが挙げられる。勿論二義とは一般的(世人的)真理として世人の言ふ語義と、逆説せる老子の言ふ語義とである。所で「天」は一般的(世人的)真理である故に、聖人も大も世人の義である事は勿論である。たゞ「地」に於ける聖人と大が如何に老子の義に用ひらるるかが問題となる。今聖人も大も共に老子の義に解するならば、「天」と「地」とを連結する事なく「地」に於てのみでも「老子の言ふ所の聖人は老子の言ふ如き大事業をなす事が無い」と解されてなほ矛盾する。高次の

認識立場に立つてもなほ矛盾する故に之を破棄する。次に聖人にのみ老子の義を有せしめると「天」と「地」との連続は「世の所謂聖人は俗界の大事業をなすが、然し老子の言ふ聖人はかゝる俗界の大事業をなす事がない」となる。今この認識を「甲」とする。次に大のみを老子の義とすると、「世の所謂聖人は俗界の大事業をなす。然し俗界の聖人は老子の言ふ如き大事業をなす事がない」となる。この認識を「乙」とする。さて次に「甲」「乙」何れかがこれと論理的に矛盾する「人」と対比し、この矛盾を解消する為に更に「人」に於て認識立場を變へなければならぬ。所で「地」と「人」とは老子の逆説としてある故に、認識立場をかへると言つても老子の立場より高次の認識立場に立つのではなく、老子の認識立場内に於て即ち「人」に於ける聖人と大との語義に於て老子の語義に、なす事を意味する。所で「地」と「人」とは一つの逆説として接続してある故に、「人」の聖人は「地」の聖人と同一である。従つて唯「人」の大のみが世人の語か老子の義か何れが用ひられるかに問題は帰着する。今「人」の大を世人の義となして「甲」と接続せしめる場合と、大を老子の義となして、「乙」に接続せしめる場合とは、共に矛盾する故に之を破棄する。従つて残るのは「人」の大を世人の義となす場合は「乙」との接続と、大を老子の義となす場合は「甲」との接続とが残る。かくして「天」「地」「人」相互にある論理的矛盾は前者に於て「世の所謂聖人は俗界の大事業をなす。かゝる聖人は老子の言ふ如き大事業をなす事がない。それ故俗界の大事業をなし得るのである」となりて解消される。

然しかく論理的矛盾を解消する所の認識立場に立つ言は、老子の側からの言ではない。世人の側から所謂聖人の本質たる大の概念の確実性を老子の言ふ大と比較して立証したものである。それ故かゝる認識によつては「地」「人」が老子の逆説として成立する事は出来ない。従つてかゝる認識を破棄するならば「天」「地」「人」の相互の論理的矛盾は後者即ち「世の所謂聖人は俗界の大事業をなす。然し老子の言ふ聖人はかゝる俗界の大事業をなす事がない。それ故老子の言ふ如き大事業をなし得るのである」によつて解消されなければならない。かゝる認識は明かに老子の側に於ける認識であり、従つて「地」「人」が

第一表

予想せらるゝ 一般的(世人 的)真理	逆		説
	否	定	
(聖人爲大)	聖人不爲大	故(聖人)成大	

註 一は世人の認識立場 二は老子の認識立場を示す

更に今その他の逆説を觀るに、老子は冒頭に老子の認識立場に立つものを置き、それが所謂世人のものとは、世人のものを持つ本質を否定する事によりて異なる事を現はし、次には老子の認識立場に立つものの本質を老子の認識立場に於て明示するといふ形式を取つてゐるのを見る。従つてこの種の逆説に於ける認識高次に一定の法則を見出すことが出来る。次の第二表の通りである。

第二表

(聖) 人 有 言	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 居	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 內 其 身	(聖) 人 有 私	(聖) 人 先 其 身	(聖) 人 自 見	(聖) 人 自 是	(聖) 人 自 伐	(聖) 人 自 矜	(閉) 有 關 鍵	(結) 有 繩 約	(壽) 者 不 死	(聖) 人 為 大	(上) 德 為 德	(聖) 人 行 為	(聖) 人 行 為	(聖) 人 見 為	(為) 學 者 有 為	
否	逆	定	否	定	否	定	否	定	否	定	否	定	否	定	否	定	否	定	否	定
聖 人 不 言	聖 人 無 為	聖 人 不 居	聖 人 為 無 為	聖 人 外 其 身	聖 人 無 私	聖 人 後 其 身	聖 人 不 自 見	聖 人 不 自 是	聖 人 不 自 伐	聖 人 不 自 矜	善 男 無 關 鍵	善 結 無 繩 約	壽 者 死	聖 人 不 為 大	上 德 不 為 德	聖 人 不 行	聖 人 不 行	聖 人 不 見	為 道 者 無 為	
而(聖人) 教 2	而(聖人) 為 事 2	是以(聖人) 不 去 2	則(聖人) 無 不 治 3	而 身 存 7	故(聖人) 成 其 私 7	而 身 先 7 66	故(聖人) 明 22	故(聖人) 彰 22	故(聖人) 有 功 22	故(聖人) 長 27	而(善閉) 不 可 開 27	而(善結) 不 可 解 27	而(壽者) 不 亡 33	故(聖人) 成 其 大 34	是以(上德) 有 德 38	而(聖人) 成 47	而(聖人) 知 47	而(聖人) 名 47	而(為道者) 無 不 為 48	

逆説より觀たる老子の世界(上)(天野)

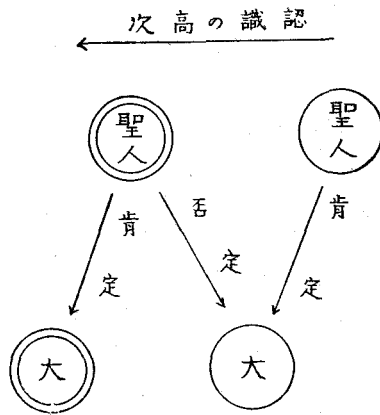
(聖) 人 有 事	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 為	(聖) 人 有 欲	(聖) 人 以 其 言 上 人	(人) 敢 為 天 下 先	(人) 之 道 爭	(法) 網 密	(聖) 人 積	(聖) 人 積	(聖) 人 積	(聖) 人 積
聖 人 無 事	聖 人 無 為	聖 人 無 為	聖 人 無 為	聖 人 無 為	聖 人 無 欲	聖 人 以 其 言 下 之	(吾) 不 敢 為 天 下 先	天 之 道 不 爭	天 網 恢 恢 疎	聖 人 不 積	聖 人 不 積	聖 人 不 積	聖 人 不 積
而(聖人) 取 天 下 48 57	故(聖人) 無 敗 64	故(聖人) 無 執 64	故(聖人) 無 失 64	以(聖人) 持 万 物 之 自 然 64	以(聖人) 持 万 物 之 自 然 64	而(聖人) 上 人 66	故(吾) 能 成 器 長 67	而(天之道) 善 勝 73	而(天網) 不 失 73	以(聖人) 為 人 已 愈 有 81	以(聖人) 為 人 已 愈 有 81	以(聖人) 為 人 已 愈 多 81	以(聖人) 為 人 已 愈 多 81

註 Ⅱ は老子の認識立場を示す。

さて、老子の聖人の「不為大」と「成其大」との論理的矛盾は大の認識内容の高次によつて解消せらるゝがそれが、老子の聖人に基いてなされてゐる。之に對し「天」と「地」との論理的矛盾は聖人の認識内容の高次によつて解消せらるゝが、それが世人のいふ大に基いてなされてゐる。即ち「天」と「地」とに於ては世人のいふ大の観点より為、不為の聖人が對立して居り、「地」と「人」とに於ては老子のいふ聖人より異なる認識内容の大が對立してゐる。かく考へるならば、矛盾の根柢は、「天」と「地」とに於ては聖人にあり、「地」と「人」とに於ては大にあると言ふ事が出来る。之を圖によつて示すと次の通

りである。

第三表



註
○は世人の認識立場を示し
◎は老子の認識立場を示す

さて、「聖人不為大、故能成其大」に於て、逆説の逆説たる本質は、前半の否定にあるのであらうか、後半の否定の否定にあるのであらうか、それとも両者にわたつてあるのであらうか。逆説は世人の立場から観る所に生ずるのであつて老子の立場からは生じて来ない。従つて一般的（世人的）真理としての命題に矛盾する所に逆説が生ずる故に、逆説の本質は前半の否定即ち「聖人不為大」にあると考へられる。更にかゝる否定を否定する事は老子の立場に於ける老子自身の否定であつて、世人の一般的真理に直接關係あるものではない。老子の認識立場に於ける聖人に於ては「不為大」と「成其大」とが矛盾しない

故に、之を同一視して「故能成其大」を一般的（世人的）真理に對比するならば、否定の否定は肯定となりその肯定は初の否定以前の肯定即ち一般的（世人的）真理の肯定とは異なるけれども、世人は老子の認識立場を理解する事なく一般的（世人的）真理たる「聖人為大」と同一の認識立場のものと解してしまふであらう。従つてそこに逆説は成立しない。然しながら単に一般的（世人的）真理の否定のみでは、老子の肯定するもの本質、内容が世人のそれと異なるのを示すのみである。それ故それが更に否定せらるる事によつて、老子の肯定するもの本質、内容が老子の立場から積極的に明示せらるる事を必要とする。かくして初の否定が一般的（世人的）真理を否定するものとしての価値を有し、逆説としての価値を發揮すると考へられる。かゝる意味に於て一般的（世人的）真理の否定の否定が必要である。かゝる必要性は逆説者の立場から考へられたものであるが、然し同時に世人の立場からも逆説が真に真理たる証拠として提供せらるゝのを必要とする。然しまた、逆説が広く論理的矛盾といふ立場に立つものとするならば、「聖人不為大」と「故能成其大」とは矛盾である故に、「聖人不為大、故能成其大」それ自身に於ても逆説と言ひ得るであらう。

(四) それに對比すべき具体的特定のな一般的（世人的）真理のない逆説

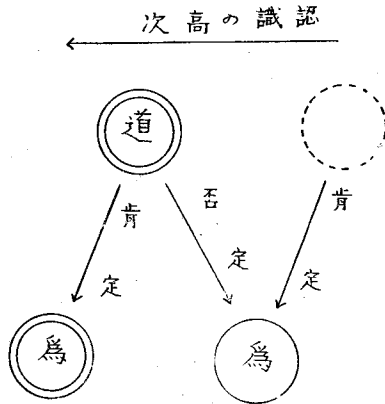
一般的（世人的）真理の具体的特定のなものに対するものではなくそれに對比すべき明確な一般的（世人的）真理がない逆説の例とし

て「道常無為而無不為」(37)が挙げられる。「道常無為」は一般的(世人的、真理の否定として、「無不為」は更にその否定として考へられる。然し「道常無為」は具体的に如何なる一般的(世人的)真理に對してであるかを指摘する事が出来ない。言表上からは「道常為」と考へられるが、所謂道を行爲の主体として世人が把握せる事は老子以前に於てなく、言表上の対比を離れて考へるならば「道常無為」は「常無為」の道が「常為」の行爲者一般を予想して、かゝる行爲者の「常為」を否定したものと考へられる。かく考へるならば、行爲者が行爲するとは当然の真理であつて、それは一般的(世人的)真理の根柢にある所のものと考へられる。それ故かゝる事を否定する逆説は老子の思想体系に於て根源的地位を占めてゐると言ひ得る。さて行爲者一般が行爲するといふ真理を否定する「道常無為」の道は、行爲者一般の世界と異つた世界の存在者であると考へられる。「道常無為」とは、道の世界が行爲者一般の世界に於ける行爲を否定する事によつて行爲者一般の世界から押出されて生じたものと考へられるからである。かく行爲者一般の世界から、その行爲の否定によつて押出された道の世界は、行爲者一般の行爲を否定する点に於て消極的に本質づけられ性格づけられてゐるに過ぎない。かゝる道の世界は無為の無に於て一面なほ無本質、無性格と言ふ事が出来る。かゝる無本質、無性格は老子の認識立場から道の世界を「無不為」と把握する事によつて始めて解消せられる。道の世界を中心として観る時それは一種の爲の世界である。然しそれは行爲者一般の世界に於ける行爲とは既に異つた行爲で

逆説より觀たる老子の世界(上) (天野)

ある。無為の無に於て一切が無であるといふ無性格が、無為の上に於ける爲として道が把握せらるゝ事により解消され、こゝに道の世界の本質、性格が明確にされるのである。かく「無為」によつて行爲者一般の境界から押出された道の世界は、「無不為」によつてその本質を明確にし得ると考へられる。「道常無為而無不為」を以上の如く解し得るとするならば、認識高次の法則は(1)に於ける逆説のそれと軌を同じうするのを見る。

第四表



註
○及○は世人の認識立場を示し
◎は老子の認識立場を示す

かゝる種類の逆説として次の表にその例を示す事が出来る。なほこの種の逆説はそれに対比を予想する具体的特定の一般的な(世人的)真理が指摘出来ないだけ、逆説自身の矛盾的側面が強調せられる。

第五表

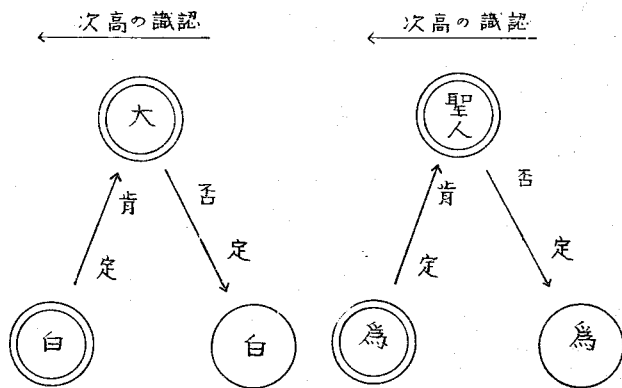
予想せらるゝ一般的 (世人的) 真理	逆		說
	否	肯定	
	道無物 常無為 無狀		(而道有) 狀 14 (而道有) 象 14 而(道) 無不為 37

註 Ⅱは老子の認識立場を示す

三 肯定(否定の否定)よりの逆説

逆説が、一般的(世人的)真理を否定する逆説から、一般的(世人的)真理を否定せるものを更に否定する逆説に進むものであるとするならば、この否定の否定即ち肯定から逆に一般的(世人的)真理を否定する逆説は、逆説が高度に発達せる結果生ぜるものと言ひ得る。「愛民治国、能無為乎」はその一例として挙げる事が出来る。老子の否定の否定(肯定)は「愛民治国」であり、一般的(世人的)真理を否定するものが「無為」である。かゝる逆説は、逆説者の思想体系が確立した後、演繹的に説く事によつて生じたものと考へられる。なほ「明道若昧」「大白若辱」もこの種の逆説であつて、道の本質、内容として老子に否定の否定として肯定せられたものは、前者は明、後者は白であり、一般的(世人的)真理に対する否定に於て世人の認識立場にあるものは、前者は昧即ち不明の明、後者は辱即ち不白の白と考へられる(大は25章により道の別名である)。これを次の表の如く示す事が出来る。

第六表



註 ○は世人の認識立場を示し ◎は老子の認識立場を示す

白の否定は辱 為は愛民治國

この種の逆説に属するものとして次の表に示せる如き例を挙げる事が出来る。

第七表

肯定(否定の否定)	逆	否	說
(聖人) 愛民治国		(聖人) 能無為	10
(聖人) 明白四達		(聖人) 能無智	10

四 否定の否定と

肯定(否定の) 否定の逆説及

世界の顯現されたものと考へられる。聖人の世界に於て先づ注目せらるゝ事は肉体の否定である。「寿者死而不亡」（原文は「死而不亡者寿」とあるも、逆説分析上かく改める。かく原文を改めたものは他にもあるが、皆それは逆説分析上からなしたものに過ぎない）とある。肉体の生の否定は同時に精神の生の肯定である。それはまた感覺的物質の否定に繋り、關鍵繩約のない精神、心の尊重に繋る。更にそれは肉体や物質を対象とする人間の欲望の否定を意味する。「欲不欲」と言ふのはそれである。更にかゝる欲望に伴ふ行為を否定する。「無為」「為無為」はこの謂に他ならない。具体的にそれは「不言」「不居」「外其身」「不行」「不自見」「不自是」……事なのである。これが即ち一般的（世人的）真理の否定たる聖人の無為と考へられる。聖人の個人的な欲望と行為の皆無は換言せば世人のそれに対する否定である。こゝに聖人が世人の世界を超越してゐるのを知る。世人の行為や欲望の否定は結局「恃万物之自然而不敢為」ことである。聖人はかく自然のまゝに放置するが故に、「我無為而民自化、我好静而民自正、我無事而民自富、我無欲而民自樸」（57）「侯王若能守（樸）万物將自賓、天地相合以降甘露、人莫之令而自均」（32）の如くに、民自ら同化し、自然が之に感応するのである。之が即ち聖人の無不為、否定の否定としての為と考へられる。従つてそこに聖人の直接的行為の加はつてゐるのを見出し得ない。それ故、「万物帰焉不知主」（34）の如き道にたとへられて大を成すと言はれる。かく人為人欲の否定により自然のまゝに放置する世界が老子の認識立場に於ける聖人の世

界である故に、聖人の世界は世人の世界を包越してゐると言ふ事が出来る。聖人の「無為而無不為」は人為人欲の否定により自然の為にまかす事である。かゝる思想を因果的に考へ、無為によつて自然に招来する結果を明瞭に目的視し、目的達成のため無為を手段化する考へ方は逆用であり、本来的思想から逸脱するものと推量される。「取天下常無事、及其有事不足以取天下」（48）「聖人欲上人、以其言下之、欲先人、以其身後之」（66）はその好例である。かく無不為の為が具體的現実の様相を帯びて来るに従ひそこに人為人欲の潜在が見られる。かゝる為は自然的為と離反せざるを得ない。更に無為さへも具體化されて積極的手段化が見られる。かゝる逆用は「無為而無不為」の根本思想が確立安定せる後に生じたものと考へられる。その間に時代の間隔があるとすれば、戦乱の様相が愈々險惡化して「無為而無不為」の思想を現実的に活用する結果生じたと推量される。その際、老子によつて逆用がなされたか、後人によつてなされたか（逆用は下篇に多いのを以てして、老子の書も亦諸子の書と同様に後人の挿入がなされたといふ考が許されるなら後者と考へられる）が問題となる。或はまた、根本的思想は思想、現実的処生観は処生観といふ二面の考を老子が持つてゐたとすればそれは処生観と考へられる。なほこの逆用は、老子の肯定（否定の否定）よりの逆説が、先づその目的を冒頭に置き「広徳」「大白」「自知」等と言つてそれを謳歌してゐる事と相通するものがある。